

から。

ダーラバ さうだつてね。

ガバンド 何時もの地震かミ、たかをく、つて床から出もしないで居るミ、眼が眩んで来て大きな音響だの、人間の悲鳴だのが凄く聞けて居た。俺の居た家の天井が落ちて、家も地の割目に這入つて居た、俺の身體は窓の板戸の間に、いろんな器具の下敷になつてしまつた。

マラン 大地震だ。

ガバンド 其の出来事の爲め多くの陰間が死んだ、其の上老人も血を口から澤山流して居たよ。老人の債權者達から、俺達は一人一人、あの菩提樹下の十字街市場で賣られた。その時、奴隷仲買の手に買はれて、遂にこんな所に奴隷として賣られてしまつたんだ。

来て見りや、つまらない事ばかり……まあ、俺の身の上言やあ、ざつミこんな話さ。

マラン 有難、大變氣の毒な身の上やあの。

ダーラバ ほんきに、いろんな運命に出つくわしたんだね、………かうやつて暮らしても、自由な身體にはなれないね。

マラン 實際だよ。

ダーラバ 毎日、朝早くから、夜遅く迄、室の中の掃除をさせたり、食事の給仕をやつたり、音楽を弾いたり。藥草の手入れをしたり………。

マラン それも、一つミして褒められた事がないんだからね。

ガバンド 一寸でも怠惰するミ、地下室の暗い處に扱ひこまれるんだもの。

ダーラバ 自分達の主人と思つてゐるから、阿蘭陀さんはいゝにしても、あの遊女だの、通詞だの、乙名だのが横柄に、漕ぎ使ふのにはやりきれないね。

マラン 先刻の異國なんか、何時でも意張りやがつて、まるで俺達は遊女の下僕見たいだ。

ガバンド あんまり、阿蘭陀さんが遊女に涎を流すんで、逆上せてるんだ。

マラン 可笑い程、その阿蘭陀さまも、遊女には、ハイ／＼言つて御氣嫌取つてるものだから。

ガバンド 一體、何年たてば、俺達は此處から歸れるのかしら。

マラン 分らないね、……………楽しみ一つないので、やりきれないよ。

ダーラバ 外出さへ出来ないで、飼はれて居る鸚鵡の様に。

ガバンド 鸚鵡の方が、俺達より幸せと思ふよ、旨い餌は三度三度貰へて、夕方になるこ

籠の中に大切にしてい入れられるんで。

マラン 俺も鸚鵡が羨やましくつて、今朝首を掴つてやつたら、あの鋭い嘴で、この手を
(手を見せて) 突かれたよアハハハ。

ガバンド 如何だい、今から此處を抜け出て、何處かに遊に行かうよ。

ダーラバ 何處へだい。

ガバンド 女買いにさ。

ダーラバ 女！。

マラン 何處へだい。

ガバンド 女でも買ひに行かなくちやたまらないじゃないか？。

マラン 何處にさ。

ガバンド 丸山に。

ダーラバ (驚愕して) 丸山。遊女を……………。

マラン アハ、、、俺達が行つたつて、揚屋に揚る事が出来ないじゃないか？。

ガバンド 行けるさ、きつこ。

ダーラバ お金は。

ガバンド 苦面する。

マラン 此處を抜け出すのには。

ガバンド 方法が有るよ。

ダーラバ (笑つて) そんな事が出来るか？。

マラン 露見したら大變だよ。

ガバンド 夜中に出て、朝早く歸へれば分るきづかいはないじゃないか？。

マラン 戯談言つちやいけないよ。

ダーラバ そんな無謀な……………。

ガバンド 實は、戯談さ。行けるもんかい。……………夢でも見て丸山遊びでも仕様よ。アハ

、、、、、、。

マラン アハ、、、。

ダーラバ アハ、、、。

外の方には、雨の音がする。

マラン お、夕立ちが。

ダーラバ 窓に降りこんで来る。

三人は立つて、窓ガラスの戸を閉め、再び椅子に依る。

マラン 眠くなつたぞ。

ダーラバ 今夜は此の廣い室で寝やうか？。

ガマンド うん、あんな汚ない狭苦しい室は御免だ。

マラン 南京虫に見舞はれてね、アハ、、、、、、、じや俺は眠るよ。

ガマンド 俺も寝やう。

ダーラバ 俺も寝るよしやう。

マラン。ダーラバの二人は下の紅毛段通の上に大の字になり眠る。

ガマンドは、卓上の品々を片づけ、其上に寝る。

しばらくして、鼾の聲がする。

ガマンド、首をあげて二人を窺がう。

鼾ます／＼高くなる。

ガマンド、足音を忍ばせ、車を降り下手に入る。

雨は激しく、風の音さへ聞える。

南壁時計がケン／＼と時を告げて居る。

ガマンドは静かに、大きな風呂敷包と、油紙を持って出る。

二人の寢息を窺ふ。

風呂敷包より、衣類を取り出し、油紙にてつゝみ終ると、又二人の寢息を聞く。
上手に近い窓のガラス戸をそろ／＼と開ける。

雨と風が吹き込む。

グーラバがウ、ンと言つて何やら、寢言を言ふ。

ガマンド。シツト立止る。

マランは、寢返へりうつ。

ガマンド、微笑して窓に足をかける。

舞臺半廻りをする。

舞臺は、阿蘭陀屋敷の窓から、皎々光が流れて居る。

窓の前方には松の大本があつて、すぐ土塀に囲まれ、土塀になつた石垣で、すぐ海が有る。

海の中には大きな棒杭が二本で三角形をして居る。

雨、風、浪の音がして居る。

一つの窓はガラス戸が、明放たれて、ガマンドが、片足をかけ乍ら。背る向きになつて、油紙の包を持つて居るのが見えて居る。

やがて、ガラス戸をそつと閉めて、窓を飛び降りたガマンドは、松の樹の下で、衣服を手早くぬぎ、裸體となり、松の樹に昇り、窓ごしに、室の中を覗き、安心したやうに地上に降りる。

其間稱妻は絶へず蒼白い光を投げて居る。

雨、風の音はやむ。

裸體になつたガバンドは、頭の上に油紙を括り、衣服は松の枝に巻きつけ、土塀の上を越し石垣を降り、海中を泳いで、去らうとする。

—(幕)—

第二幕

臺 舞

洒々たる一室、床の幅物、棚等にはいろ／＼の品飾りつけられてある。夜のことゝて明け放した室の前には、小庭をおいて、近くに向ふの離室が見える。

上手の襖を開けて仲居に導かれ、袴、羽織の男が這入つて来て、派山な緋縮緬の坐蒲團に坐る。其男は黒坊ガバンドである。

仲居 太夫さんが、すぐいらつしやいますから、お待ち下さい。

ガバンド (大様に)……………、飲むものを早やく持つて下れ。

仲居 南蠻酒にいたしましたしやう？。

ガバンド 日本酒が飲み度いよ。

仲居 ではすぐ持つて参ります。

ガバンド 一寸、待つて下れ、(懐中から金を取り出し、摺んだまゝで渡す)

仲居 こんなに澤山、……………有難存じました。

ガバンド お酒はすぐだよ。

仲居 はい。

仲居上手に去る。

ガマンド (獨白、嬉しそうに微笑し乍ら) 何年もの思ひがやつこ……極樂に來たやうだ
阿蘭陀屋敷の奴隸が、急に王様になつた様だアハ、ハ、ハ、世の中の不平不満を今夜は大
に洗ひ流して、悠々夜明けまで遊んでやらう……今頃は何もしらなくてマランや
ダーラバ達が夢見悪く眠つてる事だらう……(自分の衣服等を引張つて見) 日本人に
ちよつこも、此の化かたは分らないやうだアハ、ハ、ハ、ハ、マラン達も一所に來ればい
いのに、……あの海を泳ぐ時は、氣持ちはしなかつた、がかうやつて落付いてるこ
苦心の甲斐も有つたよ、早やく綺麗な女が來てくれ、ばい、に、……

仲居、二人山で來り、酒肴を運び、一人は去り、一人の仲居は残りて、酌をする。片手では

團扇でガマンドを煽いで居る。

仲居 お一つ如何て。

ガマンド 結構。

仲居 随分暑くるしい晩ですね。

ガマンド 先刻の夕立の時には、涼しかったが、夕立が晴れると又、もこの蒸し暑さだ、
長崎は暑いところだね。

仲居 こんな暑い土地が他にありませんか？……あなたは。

ガマンド 俺かい。

仲居 あなたは馬來ですか？、咬啣吧て……。

ガマンド わつ！ やつぱり變装しても駄目かね。

仲居 分りますよ、背後ウシロの方は大丈夫で御座いますが。

ガバンド アハ、、、さうかく、俺は咬啗吧唐人の一人だよ。

仲居 あちらも大變、暑いお國ですつてね。

ガバンド そりや暑いさ、だがね、此處の夏の様にのべつに、朝も晩も暑かないさ、朝晩の涼しい風はヒンヤリミしてい、氣持だよ。

仲居 左様ですか。さうするに此長崎は咬啗吧より餘程、暑いのですわね。

ガバンド さうだとも。

此時、上手の襖を開けて、遊女二人が笑つてガバンドを覗見して居る。

仲居はそれに氣付、團扇で去れと合圖する、遊女の顔は見えなくなる。

ガバンド 誰かい、女を呼んで下れ。

仲居 今風呂に入つて化粧をして居りますから………ほんまにお待ち遠さまですわね。

ガバンド 阿蘭陀屋敷に出入する様な、上等な奴が居るか。

仲居 ね、居りますとも。

襖が開いて、一人の若い仲居が室に入らないで、姿だけを現し。

若い仲居 おしも姉さん。

仲居 なあに。

若い仲居 一寸、此處迄。

仲居は立つて行つて、コン／＼耳つけ話をする。

仲居 困つたね。

若い仲居 如何しましやう。

仲居 あんまり我儘よ、勤めする身で居ながら……。

若い仲居 けれど、誰も来ないのが、ほんまでしやう、あんな黒（急に口を噤む）。

仲居 弱つたね、………可愛想よ。

黒坊、周囲を見渡したり、酒を飲んだりして居る。

仲居二人は、襖の中に入つてしまふ。

遠くより、賑やかな、騒ぎが聞える。

ガバンド 如何したんだらう。

手酌で酒を注ぎ、淋しそうに飲んで居る。

ガバンド 可笑しいな、………俺を黒坊くろぼうと思つて侮あざわらつてるんじゃないかしら……。

仲居、急いで來り。

仲居 大變、太夫さんが、遅くなつて申譯がありませんでした、遅くなりましたが有名な

唐橋さんがお見物になりますよ。

ガバンド (笑顔に崩れるやうになつて)さうかい。

仲居 さあ、お酌致しましやう。

ガバンド 日本の酒は旨いね。

仲居 軽いでしやう。

ガバンド 俺達は何時も南蠻酒の強いものばかり飲んで居るものだから。

仲居 そうで御座いましやうね。

唐橋は華美なる稱讃をかけ、愛嬌のいゝ顔にて、禿綾糸を連れて來り、ガバンドの傍に坐る。

唐橋 よくいらつしやいました。

ガバンド うゝん。(唐橋の容姿に恍惚カウケ見されて)

唐橋 (禿カゲに)お前は、少し風氣カゼキの様だから、今夜は早やく休んで居いよ。

禿 いね、そんなに重ヒビく御座いません。

唐橋 遠慮エンリョなんかしないで、お休み。

仲居 太夫さんの御許ごきよしだもの。

禿 では、お客さん失禮しつれいいたします。

ガバンド (懐中より金を出して)是で何か買つて下れ。

唐橋 まあ、……………お前よく御禮を申上て……………。

禿 有難存じます。

仲居 太夫さん、妾も一寸用事が御座いますので。

唐橋 あゝいゝこも、

禿、仲居町嚀しやうに一禮して室を去る。

唐橋 (盃をさしつゝ、さゝれつして)あなたは何處かで御見受けしたやうですわね。

ガバンド 俺もさう思つてる。

唐橋 さうく阿蘭陀屋敷の中……………。

ガバンド (愕然ガク)うん。

唐橋 妾が、何日でしたかね、もう二ヶ月程前でしたか？、あちらに参りましたのは。

ガバンド (頭に手ををいて)……………。

唐橋 今も此家の太夫達が、露骨に申し上げまするに、あなたを嫌つて誰もが、お相手に

出なかつたのですよ。

ガインド (何ものかを傷つけられた様に) さうかい。

唐橋 誰もが嫌がつたものですから、妾が意地になつて、此處に來たのです。

ガインド さう、それは大變ありがたう(頭を下げる)

唐橋 まあ、そんな御禮なんか、……威張つて居らつしやい、今夜は本客さまじや有りませぬか？。妾は人を好き嫌ひする事が出來ないので、例へあなたが阿蘭陀屋敷の下僕で有らうと、加比丹で有らうとい、のです、かうやつて來て戴けば、つまらぬ乍ら妾は欣しいのです、……ここにこんな時にお出下さつたのには、何か深い譯がお有りですやう。

ガインド いや、そんな事は。

唐橋 隠しだしてしたつてだめですわ。それぢや何故日本服を着てきたんです。

ガインド まさか俺達の姿では、此處の家で、登樓^{トウ}ないだらう。

唐橋 それよりも、あなたは、阿蘭陀屋敷を逃げ出して來たんでしやう。

ガインド ……………。

唐橋 逃げ出す言つても、あなたの様な方には他には行けませんね。明日は屋敷に歸へるのでしやう。

ガインド 夜明迄に歸へらなくちや。

唐橋、それなら、妾も安心しますわ、まだ大分時間も有りますから、ゆつくり遊んで居らつしやい。

ガインド (安心して) 實はね、阿蘭陀口通詞の室から此の衣服を借りて來て、海を泳いで

来たんだ。

唐橋 まあ……………そんなに返して来て下さったの！、それに嫌がるなんて罰があたりますわ、白鶴さんや、早稲さん、小式部さんなんて、自分の好きな客にはばかり行つて……………

ガバンド 私、嬉しい、ほんまに嬉しい、あなた親切者、い、女です。

唐橋 オホ、、、お口の上手な事。

ガバンド い、気持ちに酔つて来た。

唐橋 何か、あちらの面白い唄でも聞かせて下さいませんか？。

ガバンド よろしい、唄をやらう。

唐橋 お願ひ致しますわ。

ガバンド ぢや、咬啗吧の舞姫が男を慕ふ戀唄を。

唐橋 ぢや、如何ぞ。

ガバンド あつ、痺がきれた……………(顔を苦しそうにして胡坐する)

カントバントガー、アハハアーキータマルレヤ、アチレキヤアーハーア、バーイモダー
ア、アチダヤーナランカドワヌワアハ、、ア、バラタニワドワー、バラタニユワナ、ア
クイクワナー、クダラニバダ、サンペ、ナンダラユウー、クダラバーバダバダ、アボツ
チボカツチイミヅワアー、タイトツテザビヤワアラ、アバラソナタ、アーアーアバラソナ
ダヤー、、……………一寸こんなものだ。

唐橋 大變面白いものですね。

ガバンド 一つ賑やかに騒いで見やう、藝者をよべ。

唐橋 あんまり騒いで分つたら如何しますか？。

ガバンド いぢやないか？、阿蘭陀屋敷の役人なんぞは、自分達ばかりが、美しい女どもを毎日く呼び入れて、いくら奴隷がしらないが、俺達ばかりを殿しくするなんて同じ太陽の神さまに輝らされて居る人間だもの……さあ、藝者を呼べ。

唐橋 そんなにお遊になり度いのなら呼びまじやう、(傍に有る、南蠻呼鈴を鳴らす)

仲居来り。

仲居 御用で御座いますか？。

唐橋 藝者衆を、二三人呼んで下れつて御注文なのよ。

仲居 そうですか？、ぢや丁度今歸らうとして居ります、藝者さんが居りますから。

唐橋 すぐにね。

仲居 え。

仲居去る。

ガバンド 藝者が來たら、咬啗吧踊をやつて見やう。

唐橋 あなたは隅にをけませんね、なか／＼の藝人ですここ。

ガバンド (特意に) そりやさうにも、以前は旅藝人だったもの。

唐橋 ほんものですね。

ガバンド アハ、ハ、ハ。

唐橋 やかげで、咬啗吧踊を見て七十五の長生をしますよ。

特意に頭を剃つた大入道の様な髷間、赤羅紗の羽織に、唐草の紋を大きくつけて出で來り、

造の方から、何度も頭を壁にすりつけ、扇子で頭をボカ／＼と叩き。

幫間 是は／＼、御入來。いやい、お首尾の處に、拙者迄御來駕、えへツへツ、御招き下

さいまして(顔をあげ、ガバンドを見て)やあ、こりやお珍らしい異國の黒坊大明神。

ガバンド 面白そうな奴ぢや、こつちへ來いよ。

幫間 それでは、いざまづ失禮のバツバラバーのバ。

藝者三人、月琴、三味線、小鼓を持ってつゞいて出で。

藝者の一 今晚は。

藝者之二 有難存じます。

唐橋 さあ、こちらにお出で……………。

藝者の一 御免下さい。

藝者達、ガバンドの姿を見て、笑ひ度いのを辛抱して他の話に紛らし。

藝者の一 お暑い事ですね。

藝者之二 おたかさんの鼻に、蚊がこまつて居るわオホー、。

藝者之三 オホ、、、。

藝者之二 オホ、、、。

幫間 旦那、御らうじませ、あの愛嬌のい、藝者ごもを、……………オイ、藝者。

藝者の一 何んだ豪らさうに十八さんがオホ、、、。

唐橋 さあ、今から旦那の睡だから、騒いでお呉れ。

ガバンド 是をやるぞ。(皆に祝儀を出す)

幫間 (押し戴き)金ピカ／＼のピカ、ピカピカ、咬囉吧の富源者さま。

藝者の一 有難存じます。

二〇八

皆が、辭儀してゐるのを見下して。

ガバンド 俺が今から、咬嚼巴踊を初めるから、都合のいゝやうに合せて弾いて下れ。

幫間 承知の助、オット太鼓く。

仲居、大太鼓を持つて来る。

向ふの離れの室には、一人の武士と遊女が酒を飲んで居る。

幫間、藝者等は並んで、樂器を調べる。

ガバンド いゝかい。

幫間 一、二の三。

賑やかに、而して山鏡目に、三味線、月琴、小鼓、大太鼓が鳴り渡る。

ガバンドは羽織を脱いで、足下をふらくさせ乍ら、踊り初めて唄ふ。
離れの武士はチョイ／＼こつちを見て居る。

ガバンド ラバラターヤ、シヨンマーシヤ、ラツバタラヤ、ヒジマアヤーヤ、ヤ、……
チカカラ、ウダマドイチラドナジバアー、……アリダーテ、アリダーテ、カピラナテ
ー、アンバラコマラアーヤア、トウカナ、ビヤラー、ダーンナーイ、……パツデ
バーラアミチー、ヤツチヨシラツウラカヤアナ、ヤアヤチババラ、ナ、……
ヤンヤントウトツナ、ソカチヨウ、ベツチヨンバイミーナ、ヤヤン。

日本の盆踊の様な手や、身體を廻す舞いを巧みに踊り終る。

幫間 旦那、私もそいつを真似てやりましよう。

ガバンド まあ、こいつを一盃やれ。

二〇九

唐橋 十八さんの踊はい、でしやうよ。

幫間、盃を戴いてから、立あがり、三味等の音楽に連れ舞ふ。

幫間 かういふ風に、旦那にまけませんよ、アハ、、、。バラバラ~~~~

ヤンヤアーアーナ、……………バラバラ~~~~チ、カラ、ベチャ~~~~

……………バラ~~~~クチャクチャ~~~~……………

踊つてる間に、滑つて轉り。

幫間 あ、痛。

一同アハ、、、、オホ、、、と笑ひ興じる。

唐橋 まあ、十八さんの器用な事、オホ、、、。

ガバンド 今度は南蠻手品の初まり〜。

再び、賑やかな雑しになる。

幫間 入らつしやい、入らつしやい、黒坊さまの大手品、二度見られぬ、珍藝御はい。

ガバンド 先づ初まりは小手調、……………小手調が終りましたら、此の次ぎには、別嬪さ

んを二人連れまして、二人が持つて居る盃に（藝者を右左りに一人宛、立たせて手を握

り）右の方に酒を注ぎ、左りの方には酒を注がず、その注がない方の盃に右の方の酒を

通はせて御覧に入れます、はあつ！。

二三回、黒坊と藝者手を引き合ひ乍ら、廻つて立とどまる、右に居つた藝者が左りになり、

左りの方の藝者が右に。

ガバンド 御覧の通り、左りの盃に酒が一ぱいになつて居ります。

幫間 妙々、（扇子で頭をボカ〜叩く）

ガマンド 此の次は總踊、さあ太夫さんも、俺ミ一所に踊らう〜。

唐橋 オホ、、、は踊りなんかした事は有りません、見物人になつて居りまじやう。

幫間 じや、私が音頭さり、誰か一人、三味線味を弾いて、あミは總踊。

藝者の三 ぢや、私が弾きまじやう。

幫間 何んでもい、、、たゞジャンジャラ〜〜弾いて下れ。……………踊の名は南蠻黒坊

遊興の光景。

ガマンド 面白い〜〜。

三味線につれて。

幫間 バラ〜〜〜 ヤンヤアアアバラ〜……………メチヤクチャ〜〜

バラ〜〜〜。

唐橋 オホ、、、(涙を流さんばかりに、三味線を弾いて居る藝者ミ、共に笑ひこげ
る)

襖を明けて、誰やらが見て居る氣配がする。

幫間大に特意になり、益々唄と踊をつゞける。

幫間 バラ〜……………唐人鐵砲のやうにバラ……………ヤアヤアバラ……………

……………。

踊りならガマンドが襖の外の人を見つけ。

ガマンド 無禮者、透き見等する奴は。

誰とも分らぬ聲 あまり面白さうだつたので、ツイ失禮しました。

ガマンド 他人の座敷を窺ふなんて勘忍ならぬ……………。

誰とも分らぬ聲　こんな謝罪してらぢやないか？。

唐橋近づきガインドを押しやり。

唐橋　實にこちこそ失禮して居りまして…………。

誰とも分らぬ聲　黙れ。

ツカツカ室に這入つて來た男は、先刻まで離れの室に居た武士の井上九八郎であつた、大
刀を左手に引さげ。

九八郎　(怒つて)武士が謝罪したのを聞き入れないは不屈の奴。

甞間、藝者はベツタリ坐つて、震えガインドも初めの勇氣が挫けて居る。

九八郎　いやしくも俺は代官所の役人、井上九八郎ぢや。

唐橋　あまでお詫は重々致しますから。

九八郎　遊女には用はない、相手はその男だ、さあ勝負せい、(刀を抜きかけ)是へ出い。

ガインド　(震聲にて)ゆ、ゆるして下さい…………。

九八郎　貴様の踊りが、あんまり可笑つたので立見したまでのことだ。

ガインド　いえ、もう御覽になつてもいゝのです、何卒ぞくく。

九八郎、ガインドの顔を見詰め。

九八郎　やあつ！　貴さまは黒坊クロキだな。

ガインド　…………。

九八郎　黒坊ミ言へば、阿蘭陀屋敷以外には居ない筈だ。

ガインド　…………。

九八郎　さうするに益々變だぞ、一體如何言ふ譯で此處に來た。

ガマンド ……………。

二一六

九八郎 見れば、日本の服装をして居る、…………屋敷を逃げて遊びに来たんだね。

ガマンド (怖るく) 御内分に。

九八郎 見捨てる譯にはゆかない、此の大刀の錆になれ。

九八郎、大刀を振り冠る。

詰問、藝者等は狼狽し乍ら逃げ去る。

唐橋 御犯罪を冒されたことは、此の人が悪いに相違御座いませんが、萬一そのお刀で、

阿蘭陀屋敷の人を斬つたら、あなたの御身分に障りまじやう。

九八郎 うん、…………唐橋の言ふ通りだ、(九八郎、刀を鞘に納め)さあ、今から阿蘭陀屋敷の乙名に引渡すから、俺について来い。

ガマンド (萎れて)御願ひです、何卒ぞ見逃して下さい、私があなたの爲めには、生命も
投げ出しても盡しますから。

九八郎 ふん、お前の様な黒坊から世話にならんていぞ。

唐橋 如何か、ガマンドさんを許してあげて下さい！。

九八郎 唐橋には大事な情人か、お客か知らないが、俺は武士ミして、こんな事を黙つて
居る譯には行かないからね。

唐橋 武士に情け言ふものが御座いませう。

九八郎 黒坊奴、俺に引張られて行く事が出来なければ、力づくでも引ずつて行くぞ。

ガマンド (獨白のやうに) 嗚呼なんて不運な人間に生れついたのだらう…………。

九八郎 歩け！。

二一七

曲戲
東

京

文

二一八

黒坊ガインドは、悲しさうな顔をして、力なく九八郎に従つて室を出て行く。
唐橋は氣の毒そうに、ガインドを見送る。
遠くの方では、まだ三味等の騒ぎが、聞えて居る。

—(幕)—

(大正十二年五月六日)

東京文

戯曲 東京文 (二幕)

人

和田理左衛門 三十才

川島平之助 二十七八才位

王姫 董 二十才

其他 重要ならざるもの

所

東京國王城内

時

三二〇

日本の寛永十三年、初夏の頃の晝過。

舞臺

東京國王城内の和田理左衛門の書齋室。

建築はすべて唐風にして、室の背後には大理石を布きつめたる、廻り縁あり。

庭園には熱帯の植物、青々々繁り美しき花等咲き、庭には孔雀二三疋、飼はれて居る。

室、下手の方には、和漢洋の書籍多く並べられ。そのわきに日本の兜鍪飾られて居る。

中央には烏木の卓子、椅子あり。

上手の登場人物、出入する入口には紫天鷲絨の帳垂れ、室内は風通しよく、絶へず涼風に吹かれて居る。

川島平之助、羽織、袴の日本服にて椅子により乍ら煙草を飲み、廷臣と談話して居る。

廷臣 大分世間の噂に依りまするに日本人の方が、御歸國になられる御様子で御座りますね、あなたもやつぱり御歸へりになられるので、御座りますか。

平之助 さうです、かうやつて此王城を、お尋ねするのも終りが近づいて参りました。

廷臣 日本を船出なされてから随分の年月がたつて居られるので、御座りませう。

平之助 左様。(感慨深く)理左衛門さん、長崎の港を希望に輝いて船出してから、もう十年の昔になつてしまひました。其間随分いろんな異國に流れ歩いて、此處に来てからでさへ、四年といふものを夢の如くに暮らしてしまつたのですが、夢と言ふても悪夢でなかつたのは事實でした。私の身體には旋風の如くに、幸運がいつも吹いて下れて僅々の中に今の身代を作りあげてしまふことが出来た譯です。

三二一

廷臣 さう致します私達の御主人に初めから御一所だつたので御座りますね。

平之助 左様、理左衛門さん、私は子供の時から氣があつて居たものだから。

廷臣 なる程。

平之助 理左衛門さんの目的は私に反對に政治が好きであつただけ、誰でも羨望の的になるやうに、遂々此國の顧問になつてしまつて、實際は王の勢力も同じだ。その上に國王が一番寵愛して居られる王姫アヒメ董殿の婚君アヒメなられたのだから。(獨白の様に)しかし故郷に對する慕しい力は恐ろしいものだ、そんなに豪くなつても、巨萬の富が出来ても生れた國には歸へりたいからな。……私共の奥船オカフネが長崎に着したら街中の誰もが驚くことだらう。私なんかは、あの和屋の小僧だつたのに、こんなに主人以上の成功はしやうとは考へてる人もないだらう、藤藏や俊太郎の意地悪な番頭に入参量度毎に馬鹿野郎

呼はりされて散々遣使はれて居つた私がアハ、、、世の中が愉快でたまらない、欣しくて欣しくつてアハ、、、

入口より、黒切の召使、金盃に果物と金麻をもつたのを持つて来る。

(金麻とは金麻葛の葉の中に檳榔子を刻みたるを包まれたるもの)

召使 御主人は只今、應接間にて紅毛人の使節と御談話中で御座りますから、最少しお待ちを願ふやうにこの事で御座ります。(廷臣に向ひ)あなたを家老さまが呼んで居られました。(平之助に)では是にて御免下さい。

平之助 難有。(大様に頷く)

廷臣及び召使一禮して退場。

平之助 日本の將軍なんて馬鹿な奴ぢや。家光は聰明だの、松平は智慧伊豆だの言はれ

理左衛門 阿蘭陀の献媚つかいが、東印度會社の理事を遣したものだから、話が長くなつて待せて氣の毒だつた。

平之助 何かい、事件でもあるのですか。

理左衛門 何。東京の國の兵士に攻撃されるに恐しいもんだから、貢物を献上しに來たのだ。

平之助 貢物と言へば、昨年春も持つて來たのでしよう。

理左衛門 さうだつたよ。

平之助 時に、例の一件ですね、初め頃は大部分の人達が日本に歸らないと言ふて居ましたが、やはり此頃になるに歸國の支度するものが多くなつて來ましたよ。其爲め、日本町の繁昌も、灯の消えたやうになることだらうに、思はれます。

理左衛門 誰々が残るのか。

平之助 十人に残りませんよ。(指折りて數へ)多賀源左衛門、高屋久左衛門、峯左京、永

山英春、奥山恭五郎、間力太郎、それにさうしても歸へれない島原の残黨の堂崎甚内、神代一右衛門、佐々權之重。……九人です。

理左衛門 九人の他は、皆歸國に決定してるのか？

平之助 そうですとも、二千八百十三人になります。あなたがお加はり下さいますれば、二千八百十四人云ふ數になるのでござります。

理左衛門 ……………。

入口の紫天鷲絨の布に玉姫重、隠れ乍ら二人の談話を立聞して居る。

平之助 あなたは私達と相違ふて境遇が境遇だけ。……しかし何んか定められました

か？。

理左衛門 未だ迷ふて居るのだ。

平之助 迷ふて居られることは無理もないことです、私としてはお歸へりなさいとも、此國におこまりありあれも言へません。お互ひが再び長崎の地を踏めば素町人になつてしまふのですからね。

理左衛門 現在の俺には、自分の地位なんか考へても居ない、大恩の有る母を捨てるか、戀人の妻を捨てるか云ふことだ。老母には奥船の船頭に依頼して何度御渡海をすゝめたか知れなかつたが、たゞ、日蓮信者として日本を去りたくない、自分は剃髪して名も妙爲と呼ばれて、本蓮寺に起伏して居るのだから。俺の願を許されなかつた。……平之助 お互に荒い怒濤を潜つて來てから早いものですね。

理左衛門 さうだ船の沈没しさうになつた時にも、手を握りあつて兄弟は死ねば一所に契つたね。

平之助 目的の志は異つて居ても、二人は兄弟も同様です。

理左衛門 俺が此國の役人にならうとする時、平之助さんにも役人になつたらさすゝめたね。

平之助 さうでした、其時私は、役人を思ひまゝまつて、商人におなりなさいとあなたにすゝめました。

理左衛門 だけき二人の目的は或程度迄到達して、是からの平之助さんは貿易王、俺は外交王にならうとする先に、鎖國令が發表云ふ譯だ。

平之助 全く、惜しいところです。……人間の欲には制限が有ります、私もこんな事を

口にする丈老いたやうです。

理左衛門 冒険家の平之助さんが。

二人、顔を見合せて。

平之助 アハ、、、。

理左衛門 アハ、、、。

平之助 今度の出来事は兄弟として是非、あなたには歸國をおす、めしやうと考へて居ますが、亦あなたが是から咬嚼吧、呂宋、南尼羅、印都丹、波斯に國威を及ぼさうとして居られるのを知つて居りますだけ、無理にも申上げられません、……………たごへ、お互ひが遠く離れて生活する運命になつても、互の將來の幸福を考へねばならないでしやう。

理左衛門 俺の苦しい悶々の情を察してくれ。

平之助 ……………。

召使、再び登場す。

召使 (一禮して平之助に向ひ) 只今、日本町の取締、倉賀様より御使が御座りまして、明朝の引揚けにつき御相談が有りますから、一刻も早く御出て下さいまするやうにこの口上で御座りました……………。

平之助 よろしい、すぐ行かう。

召使、去る。

平之助 ぢや、引揚の相談をすました上、緩々夜にお尋ね致しましょう。

理左衛門 (考へて居る)……………。

平之助、忙しきうに退場する。

王姫董理左衛門に近づく。

二三二

董は、やゝ黒い身體に玉絹の唐服の黄い上衣、綾子の桃色の下衣をつけ、耳、首、手には映
ゆい寶石や黄金の輪等を嵌めて居る、髪には眞珠、珊瑚を鑲ばめた、鎧甲の冠を戴く。

董 妾は、平之助さんのお話をスツカリ立聞してしまひましたわ。

理左衛門 (未だ考へて居る)

董 あなたは御歸國になるに仰せになるかも知れませぬが、私共の此國は如何になりますて
しやうか？、昨晚も御父様や大臣達から御願申しましたやうに……あなたが居られなく
なりますとあの狡猾な紅毛人共が兵、隊を船から送つて來るに相違ひありません、そん
な事を考へるに妾達は心細くてしやうがないぢや御座りませんか？、東京國の威力が萬
國に輝いて居るのは全くあなたお一人のお力ですもの。

理左衛門 (得意にて) そんなに迄は思つて居ないけれど。

董 そのお言葉に云ふものは、あなたの謙遜ですわ。

理左衛門 ……………。

董 ……………。

理左衛門 お前ご夫婦になつてから三ヶ年になるね。

董 さうで御座ります、……妾はあなたが明日の曉の船で去られるやうな気がしてなり
ませぬ。鎖國令が出る以上、異國人の妾がお供して行く事も許されませぬし……妾は
さうしたらいいのでしやうか？。

理左衛門 俺こそ、さうしたらいい、かき迷ふて居るのだ。自分の最も大切な母親を、お前
ごを、ごちらか捨てなければならぬ。今の俺の心の奥底には、此國に渡つて來なけれ

二三三

ばよかつたご後悔して居るんだ。

董 妾見たいな醜い女を妻になさるより、日本には美人の多い云ふ噂だけに、きつこあなは残してお出の初戀の女の方の事を思ひ出して居らつしやるのでしやう。(ヒステリックになり興奮しつゝ、理左衛門の手を引つ張つて)……………早く御歸りなさい。早く御歸りなさい。

理左衛門 ……………。

董 薄情者。偽つき。やつぱり異國人の戀は、誰か言ふかやうに終りが悪いものですね(ハンカチを顔にあて、泣く)……………。あなたご初めてお逢ひしたのは、丁度四年前の秋でしたね、お父様ご裏庭の肉桂樹の林で、散歩をして居らつしやつた時でした。其頃、日本から豪い青年が来て居られる、キツト東京トシヤシにシマまつて政治向に参加する事に

お成りだらうご、大變な評判で御座りましたわ。肉桂樹林の御姿があなたであるごことを妾は疑りませぬでした。妾は以前から交趾國の或る貴族に戀されて居たので、縁談も大分纏りかけて居ましたわ、けれどあなたを一目した私は不思議に何かの魔物にシりつかれたやうに、あなたを忘れる事は出来ませぬでした、悶へぬいて恥かしさも打ち忘れ、お母様にお願ひしたのでした、御父様は交趾國シの外交上の爲め、初めはウンシ言つて下さいませぬのでした。けれども、欣しいごには、あなたの御計畫の外交や、貿易がごんごん調子に旨く行つたので、妾の希望が叶つた譯だつたのです。お父様が、あなたの勳功に對して、妾を妻に下さつたごあなたは思つて居らつしやるかしれませぬが……………(恥かしそうに)妾から申し出た結果だつたので御座ります、勳功なんか妾には如何でもよかつたのです、たゞ妾の戀心を満足しやうシ云ふ爲めには。あなたが愚か者で有つて

も、又御計畫が失敗しても、そんな事は關係ない事でした。が、現在のあなたは妾の戀人であり、尙英雄としての崇拜者ですわ。

理左衛門 お前が、俺を思つて下れて居ることは、よく分明で居る、又俺が身分不相應にも、東京の國民から、神様のやうに崇拜して貰つてる事も知つて居る。

童 そんなによく知りぬいて居らつしやるのなら、日本國を捨て、もい、てはありませぬか、何故此國を故郷に思ひ直して下さらないのです？。

理左衛門 俺が長崎を飛出したミ云ふこの原因は、第一五月蠅くて不愉快な事の多いからだ、徳川の政治ミか、奉行所の指圖ミか、其上日本人の階級思想。馬鹿々々しい度を通りこして居る階級の爲め、俺達町人の家に生れた者は、頭から押へられてしまふことだつた、其上に朋友や知己の小膽なミ。……是等が、俺をして現在の日本を嫌にな

らせたのだ、俺も男一正だ。成功して見せてやらう。豊臣秀吉は日本の英雄傳中の一番勝れた人ミ語られて居るが、その秀吉はこんなことをしたか、日本國中を八分通り平定した、朝鮮征伐をやつミ半分位やつたミ云ふ位のものだ。俺の眼中には鄭成功ミか山田長政ミか、餘程豪傑で、世界的人物だと思ふよ。海外の事を口にするミ小膽の日本人共がすぐこんなことを云ひ居る、彼奴は切支丹宗だぞ、ミてつもない魔法使を理想ミして居る。而して顔見るのも、物云ふのもいやらしいからなミ、アハ、ハ、ハ。……俺の大眼目は紅毛人に踏みにじられ居る、東洋の國々を眼ざませて、反對に阿蘭陀、西班牙、葡萄牙を攻め落してやらうミ考へて居る、……だが、鎖國令には困つたな。東京を去つて長崎に歸へるミ、再度の渡海は出来ないし、今迄の苦心は皆、水の泡ミなる。ミ言つて老母に孝行を盡さねばならぬし。孝ミ愛は兩立せぬものかね。……。

童 あなたは妾が、毎日懇願しても聞き入れて下さりさうでは御座りませぬ、妾はごんなに、あなたを戀してるかを、只今御覽に入れましょう。

童、懷中より小さい劍をさり出し、鞘を袖に巻いて咽喉に突き立てんぞす。

理左衛門 何をするのだ。

椅子を飛び退いて、童の手をシツカと押へる。

童 妾の血を流してし、戀に燃えついでる色を御覽にのれましょう。……離して下さい。

お離しなさい。……あなたに捨てられた妾は生きて長らへる楽しみもないぢや御座りませぬか？、今迄子供の出来なかつた事が不幸中の幸と思ひます、妾のなくなつた後では、兄や妹達が、父様母様に、孝行してくれれます。

理左衛門 (獨白のやうに) ウーム、兄弟が代つて親に孝行して下さい。

童 さあ、お離して下さい。

庭園より鎧つけた兵士甲、馳けて来る、大理石の廻縁に額突いて。

兵士甲 火急の事で、御許しを願ひます。

理左衛門、童を放つ。童倒れるやうに泣き崩れ伏す。

理左衛門 何ぢや。

兵士甲 只今、岐夜牟山の守備兵から使が御座りまして、昨年から此國を狙つて居ります東埔寨の兵士が、象や馬に乗つて攻めて来るさうで御座ります。

理左衛門 いや、攻め寄せて来たな。兵の指揮の委細事は陸軍大臣昆錫烈將軍に告げることがいゝ、萬一の用心に、あの大きな孫古伊河の堤は切つてしまつたらいゝだらう、此事も昆によく相談するがいゝ。

兵士甲 難有存じました、ては陸軍大臣に御知らせして参りまじやう。

理左衛門 御苦勞、御苦勞。役目がすんだら、ゆるり三休んだがいゝぞ。

兵士甲 いつも乍ら御慈愛深いお言葉……………失禮致します。

兵士甲、馳け去る。

董 妾は東埔寨の兵のこゝなんか、如何でもいゝので御座ります、さうしてもお歸國になりますか、妾の愛ミ東京の存亡ミをお捨てにあつても。

理左衛門……………。

董、恨めしさうに理左衛門を見上げて、再び、劍を咽喉にあてんます。

理左衛門 (涙を一ぱい眼に溜めて) 俺は永久に東京の地を去らぬぞ。

董 えつ！。(狂喜するが如く、劍を手より落す)

理左衛門 今の俺の兩眼は、涙が一ぱいで、何物も見ることが出来ない。此涙は千八百里

も隔たつて居る故郷の老母を思ふこゝこゝ、俺の近くに死を賭して居るお前の愛の感謝だ

……………先刻お前が言つたやうに、俺の兄も弟も、老いたる母を大切にしてお前に代つ

て孝養してくれるだらう。俺は王姫アヒラの愛情に生きて、身を粉に砕いて、も東京大王のた

めに、忠義を盡さねばならぬ。

董 妾が自分の夫君を引留め得たミ云ふこゝこゝは、妾の力ぢやありません、妾の朝夜信仰する妙音菩薩の御利益ミ思ひ、隨喜の涙が流れて参ります。(跪いて天井を仰いで再拜する)

兵士乙、鎧をつけて庭園を走り來り、廻廊の下より一禮して。

兵士乙 御知らせに参りました。

理左衛門、董の二人背後を振り向く。

兵士乙 岐夜牟山の守備兵がよく力戦致しました、而して山の麓の土民が、何千人もなく加勢して下れました結果は、我軍の大勝利で御座います。

理左衛門、董、欣の色あり。

理左衛門 敵は何處迄退却したか。

兵士乙 東埔寨の兵は雲を霞み、大雪山の方に向つて逃げて行つたこの事で御座ります其激戦中に白象を三頭迄生捕つたさうで御座ります。何れ守備兵の使節が参りましたらよく分る事で御座いませう。

理左門門 大雪山といへば。此國の人達は雪も霜も見たことにはないのだな。

董 日本には雪も云ふものが降りますか？。(理左衛門の顔色を見て)

理左衛門 ……………。

兵士乙 では是にてお暇申します。

理左衛門 夜襲を氣付けるやうに全軍に申してたけ。

兵士乙 承知致しました。

兵士乙、禮して去る。

董 あなたはやつぱり妾のもので御座りましたね。だけさ、あなたの御歸國なさらないことをお知りになつた母様は、お嘆きになることで御座りましょう。……………罪深い妾は地獄に落ちて行くことで御座いましょう。……………しかし、未來の恐怖よりも現在の歡樂がい……………。

理左衛門 平之助さんはあんな氣性だから、俺の歸國を見合せて事には驚かないだらうが、

日本町の人達は淋しがつて下れることだらう。……夜になると、戦捷の祝宴も、俺の弟分の平之助さんが約束通り尋ねて来ることだらう。……老母や、兄弟には何の贈り物をしたらい、だらうか。

董 妾が一番大切にして居ります、麝香の珠数を差上げまじやう。

理左衛門 老母は尼僧だから欣ばれるに相違ない。其れに紗綾、天禮女牟天以奈、黄絹、紗羅、眞球、砂糖等を兄弟に送つてやらう。……兄の利兵衛、弟の三左衛門宛に老母に孝養の事、歸國せぬ事を認めて東京文を平之助さんにこまづけてやらう。

理左衛門、紅毛用紙に毛筆にて毛紙をしたよめる。

何處ともなく鼓、太鼓、銅鑼、笛の音楽賑やかに聞へて来る。

董 戦捷の祝いの音楽が初まつて参りました。

理左衛門 (筆の手を休めず) さうぢやな。

董、理左衛門の肩を抱くやうにして、書かれて行く手紙を晴々しい顔にて見詰める。

—(幕)—

戲曲
八
岐
大
蛇

曲戲 八岐大蛇

人

八岐大蛇
素盞鳴尊
奇稻田姫
日牟日田日

高志國の豪族
曾戸茂梨より渡來の人
脚名椎の娘
大蛇の臣
青年
青年
處女
初老

其他、大蛇の家來大勢。
所

出雲國鳥髮峯。

時

神代時代の或秋の日。

舞臺

鳥髮峰の山中。

樹々には紅葉の葉を繁らせ、秋草は地上一面に咲いて居る。なかでも椋の巨木目立つて見ゆ。岩石は所々に見え、大深山の趣がある。

大勢の若者は、或は鹿を、或は猪を、或は山犬を、或は山羊を、或は兎を、或は鶴を、或は鷺を、或は雉子を肩に擔いだり、地上に引ずつたり、二三人で擔いだりして、總て狩獲の獲物を左手より右手に運んで居る、獲物には矢が何れにも刺されて居る。

大勢の若者が立去つた後に三人の男が現れる、皆、弓矢を肩におよい、劍を携へて疲勞しきつて居る。

一番背後の男が痛さうな足を引すり引すりし乍ら。

家來の一 おい、俺はもう疲勞たぞ。

家來の二 (振り返へり)これしきの山路で疲勞たなんぞ弱音を吐くも、大將に叱られるよ。もう一寸の辛抱だ、山の嶺に出るには。

家來の一 お前は足が達者で元氣がいゝが、俺なんぞはたまつたもんじやない。頼むから一寸の間休んで下れい、後生だから……。

家來の三 俺も何んだか勞れが出て來さうだ、まあ休む方に賛成するかね。

家來の一 俺の味方が出來て心強い事じや。(地上にぎつかま胡坐する)

家來の二 弱虫等の寄集りだアハ、、、じゃ休んで行く事にしやう。

二五〇

家來の二、三も地上に胡坐する。

家來の一 俺等は力業がないばかりに、こんなに何時迄も苦勞をしなければならぬんだね。

家來の三 全くだ、俺達の今迄の過去や、これから先の未來を考へるご心細くつてしやうがない、弱いものに生れるんじゃないな。

家來の二 又くよくよこ初まつたね、お前達の言ふ事には大に理はある、俺も口でこそ強い事ばかり言つては居るが、内心はお前達と同じだよ。だが物は考へやうさ、あの鳥や獸の事を考へて見るがい、幾何豪らさうな力があつたつて人間様には勝つこはありやしない、その人間様に生れたのが、せめてもの慰めだよ……三日間こいふもの俺達が朝

から晩迄馳けずりまわつて、此の弓の力で何奴も此奴も射てしまつたじゃないか……俺達の國だご勝手もよく分つてるんだが、こんな初めての國に來ちや、道なんか分らないし、ずほらする時もないし面白い事なんか、からつきしだめだ。

家來の二 兄哥の言ふ通りさ、此國は珍らしい寶物の澤山あるい、所だご聞いて來たが、寶物ごころか、山又山の山ばかりじゃ、嗚呼々々奴隷なんかにやなるものじゃねえぞ家來の三 なるものじゃねえご言つたつて仕様がねえや、俺達の生れつきの不運だ。腕力の強くならなけりや面白い事も愉快な事も出來ないのだからなあ。

家來の二 強い者勝の世の中だ、強くさへありや何人の妻も持てるし、勾玉や銅鏡だの、豊御酒だの、美しい絹の衣服をも纏ふ事が出來るのだ。

家來の一 俺の一生か、つても勾玉一つも飾るこは出來ないのだらうな。

家來の二　そ、そんな贅澤な真似が出来るものか、俺なんか考へた事もねえぞ、もう馬鹿々々しい、考へるなく。

家來の三　考へるなと言ふても、こんなに足が痛めばやはり考へるよ。忌々しいぞ、俺達がかき使はれて澤山な護物を集めても當然の事アツクシキで、是が旨く數が揃はなかつたら、それこそ大變だ、すぐ様頭から睨みつけられて、此首が飛ぶんだぞ。まるで薄い氷の上を歩いて行く時のやうな生活だ、恐ろしい世の中に生れ落ちたものだ。

家來の一　だが、御大將は慈悲深い方じやないか？。初め俺は奴隸になされた時、うつかりお住居の前を通つた、それも知らずに通つたのだつたが、秘密の様になつて居るあのお住居の前を無断にて我々が通過するミ、武器庫の横で縛首になるのじや、俺が危く一生を棒に振るミころを許して下さい下さつたお方じや。

家來の二　さう言へば俺の以前に仕えた大將よりも、今の大將の方が何れだけ優しいかも知れないぞ。

家來の三　さうか、俺は初めから大將は今の大將より他に仕えた事のねえので、他の國の大將の事は知らねえんだ、じやこれ位の事ミして苦しいのも我慢するか、

家來の一　仕方のねえ事さ。

家來の三　(腕組み乍ら孝に考へに耽つて居たが)此附近の豪族をお招きになる饗宴の御馳走を取に行く役目を仰せつかつた俺達は是でも幸運の方かなあ。

家來の二　幸運といふ事は言へまいが、まあ〜それに近いのだらうよ。

右手より家來の四、出て来る。

家來の四　手前達は何してゐるんだい、もう狩獵に行つた人達は皆、山嶺に集つて酒壺を賞

つて酒盛をして居たよ。

家來の一 (立上り)酒を聞いちや、咽喉佛がガク／＼鳴る様じや、さあ行かうよ。

家來の二、三も讀いて行かうとする。向ふより低く白鶴飛んで来る。

家來の二、素早く弓に矢をつがゑ狙らふ。

家來の一 待て／＼。

家來の二 (齒がみし乍ら)何故こめるんだ、あんないゝ獲物を…………。

家來の一 護物はもう充分さ、俺達より幸福な鳥を退してやれ。

家來の三 (鳥の去つた方を望み)鳥は自由に空を馳けて居る。

家來の一 さあ。行かう。

家來三人去る。

家來の四、三人を見送り。

家來の四 鳥を羨やんで居る者は俺ばかりじゃないんだな、奴隷の誰もが人間より鳥になりたいたんだと見える。

家來の五、右手より來り家來の、四の肩を敲き。

家來の五 (繩を見せ)此の繩なら大丈夫だ、こんな大木に昇つて枝からアヲ下つても切れる事はないだらう。……如何したんだ返事もしないのは。

家來の四 俺、人間が嫌になつてしまつたよ。

家來の五 アハ、、、可笑しな事を言ふんだね、人間が嫌にアハ、、、。

家來の四 同じ人間でも奴隷に生れ落ちた俺なんか一生駄目さ。浮かび上る娑婆もなし。

家來の五 馬々鹿な、馬鹿な事を言ふな、奴隷だつて國造だつて、縣主だつて、やはり人

間じやないか、俺達の心がけ一つで、立身出世は出来るよきつこ出来るよ、お前の様にくよくよしちや如何する。……稻置、別、豪族、きつこなれるよ。そんな事を考へるよ、俺達の與へられた木實を探りに行かうよ、俺は大將の命令こいふより、神のお教へこ思ふて喜んで悲しい事も苦しい事も勉めて居るんだ。

家來の四 縣主や稻置になれるだらうか？

家來の五 なれる共、きつこなれるぞ、腕つ節の強い者の天下が何時かは智者の天下に變るんだ。

家來の四 その智者の天下には何時なる事だらうか？。

家來の五 その天下になるには……與へられた仕事を神の教へこ思ふて谷間に降つて行かう、あそこには赤い大きな木實が鈴生かすして居のを見こけておいた、猿や栗鼠が惡戯を

しない前にお前こ二人て探つて來やう。

家來の四 兄弟。

家來の五 おい。

家來の四 俺は今、此の山を脱け出さうこ考へて居るのだ。

家來の五 脱け出ても仕様がなないじやないか、此出雲の國にも澤山の人が住んで居るのはなし。……介迄多くの兄弟が奴隸の苦をのがれる爲め、脱走しては、狼だの虎だのの餌食になつてしまつた事はお前もよく承知して居るだらう、悪い事は言はない、俺を信じて俺の言葉に従つたらいい。

家來の四 俺は、俺を生んで下れた母の家に芋が入用で、俺こ芋こが交換されたんだつてね。

家來の五 麻や絹、苧が豪族の生活に尤も大切なものじゃ。お前ばかりじゃないぞ、何百
 こ居る奴隸達が、皆、お前の様に人間の身體と品物が交換されたのだ、俺なんかは奴隸
 として、主君を四度も代ゑて居る、強い主君へ強い主君へ、渡されて居るのだ、一思ひ
 に自殺しやうか、迄考へた事は何回だつたか知れた事じゃない、だが人の死は易くして
 生れ出る事はもう是で終りだからね。

家來の四 (眼をしば叩いて) 兄弟。谷に降らう、而して木の實を探つて來やう。

家來の五 うん、よく俺の言ふ事を諾いて下れた、俺は嬉しいぞ、何事も思ひ切が第一だ、
 じゃ早やく行かう。

二人去る。

鳥の鳴る聲聞えて來る。

家來二人、鹿の毛皮を持つて登場。

家來の六 此處の石の上がい、だらう。

家來の七 さうだね、此處がい、く。

二人、石の上に別々に鹿の毛皮を置く。

家來の七 じゃ俺達も獸の皮を剝くのを加勢しに行かう。

家來の六 眼がまわるやうに、一日中忙しいんだな。

家來の七 しかたのない事だ。

二人去ると同時に、左手に人の聲がある。

男の聲 さあ、もう此處迄來れば大丈夫だ。

女の聲 (泣聲) 妾を許して下さい、歸して下さい。

男の聲 未だそんな事を言つてるのか諦めの悪い女じゃ。

二人の家來、一人の女の手を無理に引張つて出る。家來の手には魚釣り道具を持つ。

女は美しい絹の衣服を纏ふた美貌の持主。

家來の八 もう一足こいふ處だ、さあ歩け歩け。

女 許して下さい、妾の足ではこても、歩けさうにありません。

家來の九 何を言ふんだい、先刻も向ふの高い山で、歩けないと言ふもんだから、俺が背にしてやつたじゃないか？。

女 (苦しさに) 眼が眩みさうになつしまいました、妾にはこんな怖ろしい、山だの谷だのつて眞實に歩けません。

家來の八 女ご思つて、先刻から優しくして居ればいゝ氣になりやがつて……………。

女 ても如何しても歩けません。

家來の九 嘘つけ！。隙さへ見せれば逃げやうくこして居るくせだ。

家來の八 歩かなけりや擲り倒すぞ。

家來の九 痛い思いをしない内に歩いたら内じやない？。

家來の八 己奴、かうして下れる。

手を振りあげて拳をかため打たんさする時。

男の聲 待て！。

家來の八、振り返へり見て。

家來の八 お、日日日さまがお見えになつたぞ。

家來の九 さうか？。

日日日日、大刀を持つて現れ。

二六二

日日日日 虚弱い婦人を捕えて如何するのじや。

家來の八 歩けないくミ申しまして、此處を動かぬもので御座いますから。

日日日日 而してその婦人は一體何者じや。

家來の九 私共は今日、川魚を漁りに行く番に當りましたので、可愛の河上より笹の河上を歩き廻つたので御座いました。

日日日日 うん。

家來の八 しかし、い、川魚を手に入る、事が出来ない代りに、笹の河上のあたりで、此の女が、河水を壺に汲んでるのを発見致しました。なか／＼華奢な姿をして居りますので此の女の父母も會いまして、此の女を下れいミ談判致しましたが、如何しても下れ

ないものですから。

家來の九 二人して嫌がるのを無理に連れ出して参つたので御座います。

日日日日 さうか、だが、かねて御主君よりみんなに婦女子に就いては御注意があつたかは忘れないであらうな。

家來の八 (頭を掻いて)ては御座りますが、あまりに美女で、あんな檜柴ばかり生えて居る土地には惜しいもので御座いますから。

日日日日 其の婦人を如何しやうと思ふんじや。

家來の八 御主君さまに献上しやうと思ひまして。

日日日日 ふん、そりやい、考へかも知れない、何しても御主君は此の國にて未だ御結婚遊ばした事はないからね。美丈夫のお方だから故郷や亦到る土地で澤山の婦人の方から

二六三

ツイ〜騒がれなすつては御結婚になられるんだから。お淋しい旅中に、よく氣がついた。

家來の八 ありがたう存じます。

日日日日 だが先刻の様に亂暴をしては不可ないぞ、御主君に献上する爲めにお連れ申したのなら、もう少し鄭重にしてあげなけりや。

家來の九 面目次第も御座いません。

日日日日 賢者の様でも奴隸は奴隸だけの智恵だなアハ……………。

家來の十、右手より馳けて來り跪き。

家來の十 大將の御出でて御座います。

日日日日 さうか？。

八岐大蛇、大勢の家臣を引連れ靜かに出で、真中の鹿の毛皮の置かれたる石に腰を下す。

日日日日 穢い場所にて御座いますが、獸の皮を剥ぎ終ります間だけ、暫らくこちらにて御辛抱をなさり下さいますやうに。

八岐大蛇 いゝこも〜。

日日日日 奴隸達が、よく働きますので昨年にも増して護物が澤山ござれまして御座います。

八岐大蛇 それと言ふのも、お前の力が預つての事じや。坐を占めたらいゝ。

日日日日 恐れ入つて御座います。(もう一つの石上に腰かける)

八岐大蛇 (女に眼をつけ)其處に珍らしい婦人が居るが何者だ。

日日日日 只今、申上げやうと思ひ居りましたので御座います。私が丁度此處に参ります

ミ、川漁に参りました奴隸が、此婦人のお供をして参つたので御座います。

八岐大蛇 何處の生れの者か？。

日日日日 笹の河上に兩親ミ共に生活して居られるのだそう御座います。

八岐大蛇 笹の河上、出雲國の者じやな。

日日日日 は、左様で御座います。

女はツツと恐怖心かられて、地上に跪いたやうにして居る。

八岐大蛇 こんな深山に何用があつて参つたのであらうか？。

家來の八、九、進み出で。

家來の八 御主君の御慰めにもミ思いまして。

家來の九 私共が連れ参つたもので御座います。

八岐大蛇 本人が快くすゝんで來たのか？。

家來の八 ……………。

家來の九 ……………。

日日日日 管御主君に忠節な家來達の行爲で御座います。

八岐大蛇 無理に連れ参つたのだね。以後心かけて何事も無理にしては不可ないぞ。

家來の八 畏りました。

八岐大蛇 (女に向い) 汝には眞に氣の毒であつた、許してやつて下れ。

女、安堵した顔色になり一禮する。

八岐大蛇 名は何んミ呼ぶのか？。

女、羞恥み乍ら答へず。

日日日日 申上げたらい。

八岐大蛇 近うすゝめ。

日日日日 遠慮なく申上げたらいゝぞ。

女 奇稻田ミ申します。

八岐大蛇 いゝ名じや。私は高志の國の八岐大蛇ミいふ若者じや、見知りをして下れ。

奇稻田姫、八岐大蛇をしげんくミ眺め乍ら、段々顔を赫らめ、俯く。

八岐大蛇 兩親は健在か？。

奇稻田 はい、二人共高齡で御座います。

八岐大蛇 それは目出度い、定めし愛娘だらう、父の名は何ミいふかな。

奇稻田 老翁は脚名椎ミ申します。

八岐大蛇 母は、

奇稻田 老嫗は手名椎ミ呼んで居ります。

八岐大蛇 翁嫗は大切なものであらうね、私は幼少の折、兩親を亡くしてしまつたのだから父母の大恩ミか、愛ミかミいふ事が分らないんだ、高齡の兩親であれば一増大切に勞つてやれ。

奇稻田 (獨白) 何んミいふ優しい雄しいお方だらう。

八岐大蛇 道中は定めし難澁した事だらう、見れば衣服にも茨の傷跡がある。

奇稻田 ……………。

八岐大蛇 私達は男ばかりの一隊だから、汝を慰めるやうなものがない、道中の疲勞を休める迄此の山に滞在してから歸つたらいい、歸りには家來に送らせてやるぞ。

奇稻田 まあ！まあ何んこいふ御親切なお言葉だらう、妾は如何なるのかこ不安で堪らなかつたが、こんなに勞イッパられるのを思ふに嬉しくつてたまらない、是こいふのも神々の御守護に相違あるまい。

日日日日 (家來一同に) お前達は引さがつて休息してもいゝぞ、私が居るから。

家來は皆、一禮して右手に去る。

日日日日 私も背後の椿の下に休せて戴き度いもので御座います。

八岐大蛇 (頷く。日日日日も去る) 其處にかけたらいゝ。

奇稻田 はい。(靜かに石上に腰かける)

八岐大蛇 荒くれ男ばかりのこゝで、さぞ驚かれた事だらう。

奇稻田 初めはみんななるのかこ心痛致しましたが、お情深いお救を得まして妾は嬉し

くてなりません。

八岐大蛇 さうか、私は汝が定めし私を恨んで居るこゝ、思ふて居たのに。

奇稻田 勿體ないお言葉で御座います、如何してお恨み申しませうぞ。

八岐大蛇 汝は眞心から言つてるのだらうね、その言葉は。

奇稻田 神かけて誓いを立て、御覽にいれてもよろしいのです。

八岐大蛇 眞心から私を恨ますば、私を愛して下さいは如何じや。

奇稻田 まあ、冗談ばかりおつしやつて。

八岐大蛇 やはり汝は私を恨んで居るこゝだらう。

奇稻田 めつさうもない事、あなたを恨みましたら最後、キツト罰があたりますよ。

八岐大蛇 では、汝の眞心を知る爲めに、神占者を呼んで見やうか？。

奇稻田 水臭い、いくら神占者が何んぞ申しましても、妾の心に變りは御座いません。

八岐大蛇 そんなに變りないのじゃ。

奇稻田 ……………。

八岐大蛇 翁姫の許しを得なけりや、俺を愛してやることは出来ないのじゃな。

奇稻田 そんな事は御座いませんよ。

八岐大蛇 では、私を嫌つてるのか？。

奇稻田 そんなに見えますか？。

八岐大蛇 又の心の奥底は神占者以外には、分るものじゃない、優しい花でも刺さる怖ろしいものや、毒さいふもの迄あるのじゃからな。

奇稻田 まあ、怖ろしい喩^{たと}えて引つ張り出されて…………。

八岐大蛇 私は汝を噴めて居るこ、段々魂の中に炎々燃え盛るものがある、私は幾人の婦人にも結婚して居る、いろくんな政略上の爲めに結婚の数も相當にある。然しそれは我々の地位に、我々の國の習慣じゃ。汝が結婚を許すなら此の國に止まるか、或は私の國に連れ歸るか、汝の好きな様にしてやらう、私は不思議に身も心も盪けて行きそうだ。

奇稻田 (歡喜して獨白の様に)何んぞ言ふ氣高い而して喜ばしい仰せだらう、妾のやうな入里の稀れな田舎者を、尊いお方の愛の手に抱かれやうなきは、まるで夢のやうだわ妾の生命を捨て、も、此のお方を愛してあげなけりやならない。

八岐大蛇 早やく返事をして下れりやい、のに。

奇稻田 (首に飾つた匂玉の中より、紅瑪瑙管玉を取り出し、大蛇に近づき、跪き)妾の御返事の印を致しまして。

八岐大蛇 (晴れやかに微笑し) 汝の大切な管玉を、私に呉れるのは、私を愛する意味を
取つてもいゝね。

奇稻田 ……………。(顔をそむける)

八岐大蛇 (管玉を受取り、自分の勾玉の中に入れて後、勾玉を取り出し、奇稻田の掌に握
らせ) これは私の心じや、硬玉の勾玉と言つて、不呼國の豪族と争つた時の戦捷記念じ
や、大事に幾久しく保存してお下れ。

奇稻田 (勾玉に接吻し、自分の勾玉の中に納め、小聲にて) 御安心なさいませ、妾の愛情
は此の鳥髪峯の草や木がなくなつてしまふ共、變るものじや御座いません、あなたが
國にお連れ下さる事が出来ない場合には、翁姫と一緒に、笹の河上で幾年でもお出にな
るのを待つて居りまじやう。

八岐大蛇 いや、翁姫の許しを受けて、私はきつみ汝を故國に連れ行くであらう、亦翁姫
も共に私の國に來たらいゝ。私の國は温暖で、清水も渾々湧いて居る、木の實も絹も
寶石も豊富な處じや、たゞ惡獸の居ないのが何よりだぞ、かうやつて遙々此處まで出向
いて來たのは獸の肉を、獸の皮が欲しいばかりの爲じや。

奇稻田 眞實にお連れ下さいますか？

八岐大蛇 可愛い姫よ、私を疑ふな、高志の國の者には信義といふものが有るのじや。

奇稻田 妾は躍りたくつてしやうがない、まあ何んといふ幸福な世界が、眼の前に現れて
來たことだらう。

八岐大蛇 (奇稻田の手をシツカ握り締め) 翁姫は家來を遣はして、此處にお迎えしやう
汝が居ないので心配して居られる事だらう。

奇稻田 え、何ものよりも大切にしていきて居る、妾を何れ程心配して居られるか知れ
ませんよ。

左手の方に、人々の騒ぐ聲がする。

八岐大蛇 (立あがり)何事だらう。

日日日日、急ぎ現れ。

日日日日 此の山には嚴重な見張りの兵が居りますが、何か起つたか見えますぞ。

岐稻田 戦いが初まるのじやないでしやうか？。

日日日日 何んとも分りませんが。

大勢の聲 退れ、退れ、

人の聲 貴様等がぢたばた騒ぐ、職殺すぞ。

大勢の聲 此の刃が見えぬか。ヤレ。ヤレ。

人の聲 アハ…………。子供騙しの真似事か。

一人の家來、飛んで出で、跪き。

家來の十 (息をはずませ)見慣れない怪しき男が、此の山の中に這入つて参りました。

日日日日 何人か？。

家來の十 たつた一人きりなのです。

日日日日 無禮な奴じや、此處に來たら斬り捨て、やらうに。

家來の十 (振り返へり)來ました。

日日日日 (伸びあがり見乍ら)あの白い服をつけた、丈高い奴じやな。

家來の十 (恐怖して)は、はい。

素盞鳴尊、大勢の家來に取巻かれ、悠々と來る、大勢の手には劍や鉞、弓が向けられて居る。

素盞鳴 (睥睨しつ、) お前達の武器が、此の頑硬な筋肉に刺さると思ふかい、こけおきして、ぢたばたするより、俺に酒の一杯も振舞ふては下れないか、咽喉が乾いてしやうがない、切角大きな瀧を見つけたのでグツミ飲み干そうにして居た處に、熊笹の中から一人の男が飛び出して來たので、此の拳で擲り殺して丁ふた。ミころがそれが初りて、小男共がひつきりなしに出て來てわめくわくアハ……。

日日日日 (素盞鳴の前に立ち) 今頃、此の山中を登る不敵の者は何奴だ。

素盞鳴 何奴でもえ、さ、お前連こそ何者じや、俺は此の山に如何しても來なけりやならない重大な用件があるんじやぞ。

日日日日 何んな用件か？。

素盞鳴 五月蠅い。たゞ黙つて俺を通せばいいのだ。
日日日日 ならん。
素盞鳴 ならんとは、通さぬこいふのか？。
日日日日 さうだ。
素盞鳴 腕づくでも通つて見やう。
日日日日 こりや面白い、さあ腕づくで通すか、通さぬかの勝負じや。
素盞鳴 一度にか、つて來い。
日日日日、劍を抜き放ち、素盞鳴に飛びかへらんとする。
八岐大蛇 待て、待てこいふのに。
素盞鳴 こゝめるのは誰じや。

八岐大蛇 私じゃ。

素盞鳴 ほう、見受けるころ勇しい名譽ある若者の様だが。

八岐大蛇 何處から来た人か？。

素盞鳴 貴様こそ、何處の國人だ。

八岐大蛇 何處の國だと言ふ事が出来ないのか？。

素盞鳴 面倒臭い奴だ、言つて聞かしてやらう、曾戸茂梨ソシモリより海を渡つて来た者じゃ。

八岐大蛇 聞いた事もない國じゃ、私は高志の豪族の一人じゃ見知つておいて貰ふ。

素盞鳴 貴様の國では宗教は何を信じるのじゃ。

八岐大蛇 俺の國や隣國では、誰もが蛇神を祭つて居る。

素盞鳴 蛇神、蛇か、馬馬鹿々々しい。八岐大蛇 無禮な言葉は慎しむがよからう、

八岐大蛇 而してお前の國では。

素盞鳴 俺の國では太陽神を拜むのだ。

八岐大蛇 (空を指さし) あの日輪を祭るのか？。

素盞鳴 さうだとも。あの太陽神の尊さを傳へんが爲めに、多くの兄弟の中で、俺が選ばれて、此の出雲の國に上陸した素盞鳴と言ふ荒くれ男だ、俺は其目的であるが、今籬の河上に来るこ、腰も曲つてしまつて居る老翁と老嫗が、此の山を仰いで嘆いて居た、あまりに不憫さ故、聲をかけてだんく尋ねて見るこ、たつた一人の愛娘が、怖ろしい悪魔に奪はれてしまつて、生甲斐もないこわめくのじゃ。

八岐大蛇 その老翁老嫗の名は。

素盞鳴 脚名椎と手名椎と言ふたよ。

奇稻田 妾は如何したらいいのでしやう？、親不孝者になる妾は。

素盞鳴 娘は奇稻田に言つて非常に美人ださうな、それで俺の好奇心が夏の雲のやうに湧いて來たんだ。

奇稻田 (素盞鳴尊の前に進み出で) 兩親も面憂れして御出で御座いましたてしやうね。

素盞鳴 兩親は誰だ。

奇稻田 妾が、その娘で御座います。

素盞鳴 (しげく顔を眺め) うん、お前か？ 無事でよかつた、妾はもう大蛇奴に吞まれてしまつて居るを考へくして來たが、まあ無事で結構じや。もう俺には用は無い、さあ急いで山を降らふ、俺の肩につかまつて下れ。(屈む)

八岐大蛇 (驚愕して) ななにをするのじや。

素盞鳴 俺は此の娘の兩親に頼まれて、娘を迎いに來たのじや。

八岐大蛇 その娘は私は結婚の約束をしたのじや。

素盞鳴 (烈火の如き怒りの聲にて) 黙れ。誰の許しを得て結婚した。俺は兩親より、此の娘を買つたのだ、俺こそ此の女の花婿だぞ。

奇稻田 え、それは亦、如何して御座います。

素盞鳴 大蛇退治をして首尾よく、娘を救い出して下れたら、大恩人のあなたに娘を差上げましやうと涙を流して懇願したよ。

奇稻田 でも、本人の妾が此のお方に結婚の約束をしてしまいましたもの。

素盞鳴 一体貴様は何物じや、此の山中に兵を屯したりして、

八岐 大蛇八岐大蛇と呼ばれるものさ。

素盞鳴 (眼を圓々として、大蛇に近づき、呆然としたる後) 大蛇か？

八岐大蛇 さうだ。

素盞鳴 ふん、大蛇か？、お前が大蛇か？。

八岐大蛇 何故、驚いて居るのかい。

素盞鳴 嘘言じやあるまいな。

八岐大蛇 實の名は岩巢能善羅と言ふのだが、蛇身の化身だく、人々が、私を崇ふて誰言ふもなく八岐大蛇と言ふて居る。

素盞鳴 (獨白のやうに) そ、つかしい老翁奴が、………俺も浮かみ信じて大蛇のみ思ふて居たら、何んだ人の名だなあ。………大蛇の身は一つで、頭と尾とが八つづ、あつて眼は赤玉の如くピカリ／＼と光り、その身にはいろんな蕪繁り生い、背には柏、杉、檜

松が生え、長さは谷八つ峯八つの間にわたり、腹を見れば眞赤な血がただれて居る等と眞しやかにあの脚名稚奴、法螺をつきよつたか？ アハ、、、。娘だけがだけは法螺以上の美人だ、今迄にこんな、女を一目に見た事はありません、善羅奴、此娘に惚れこんで連れ出したに相違はあるまい、結婚したつて何んだつて、俺のものにしなけりや、俺の虫が承知しないぞ。(奇稻田姫の手を握り) 先刻も言つた通り、翁姫よりお前を貰つたんだから俺と此山を早やく立去らふ。

八岐大蛇 待て、その婦人を渡す事は出来ぬ、私の力にかけても。

素盞鳴 (侮蔑して) 力にかけても、アハ、、、。面白いその一言じや、俺の力に勝ち得る見込があるのか？。

日日日日 主君を侮る憎い奴、(家來の大勢に向い) 此奴を殺してしまえ。

家來の一 お。

家來の二 高志の兵の力を見せて下れやう。

家來の大勢、素盞鳴を取り圍む。

素盞鳴 (大喝) 騒ぐな!

家來の大勢、後退りする。

八岐大蛇 (家來に) 待て。其の男に力業をして見やう。

素盞鳴 何んなりとも。

八岐大蛇 じゃ、力業に勝つた者が、その婦人に結婚するこゝにしようぞ。

素盞鳴 ごうせ俺のものだ。

八岐大蛇 じゃ、此の大石を動かしたものが勝たぞ。

素盞鳴 よし。

八岐大蛇、大石に手をかけ、満身の力にて、大石を揺り動かす。

八岐大蛇 如何です。

素盞鳴 俺はもつこ大きい方の石を動かすぞ。

大蛇の動かしたよりも、大きな石を何の苦もなく動かす。

素盞鳴 参つたか?

日々日、劍の柄に手をかけ、素盞鳴を斬らうとする。大蛇は眼で制す。

八岐大蛇 今度は、此の大木を揺すつて、木の葉の多く落ちたのが勝にしよう。

素盞鳴 よし。

大蛇、背後の巨木を揺する、木の葉がバラバラと散る。

日日日日 主君が勝に定まつた。此の怖ろしい程の巨木が、あんなに揺れたんだもの。

素盞鳴、無言にて、巨木を揺する。木の葉ザラザラとして、雨の降る様に多くの木の葉、落ち散る。

素盞鳴 さあ、俺が揺すつた木の葉の数が非常に多いぞ。

八岐大蛇 いや、私の方が多い。

素盞鳴 馬鹿言ふな。

八岐大蛇 では証拠があるか？、二人の揺すつた木の葉が一所になつてしまつた以上、何れくが自分のものであるか分らない。

素盞鳴 卑劣な魂の所有者だ、俺に降参を早くした方が、お前の爲めになるよ。

日日日日 じゃ、かうして下れやう。

日日日日、剣を抜いて斬りかゝる。

家來の大勢、素盞鳴を討たんぞ騒ぐ。

素盞鳴 高志の國の卑怯者共、俺を騙し討ちにするのか、かうなれば仕方がない、首塚を築いて見やう。

八岐大蛇 皆、靜まれ。敵手は一人の男じゃ、私共男らしく一騎の勝負をしやう、皆手を引け。

日日日日 主君にお怪我でもあつては。

八岐大蛇 討つ討たる、は運不運じゃ。さあ、二人の勝負を見て居れ。

日日日日 残念じゃ。

家來の大勢、手をひき、退き二人を見守る。

大蛇、素盞鳴、銀と銀を以つて、息を殺し身構え、容易に刺さんとせず。

素盞鳴、一聲高く叫んで、大蛇を突く。

大蛇受け損じ、腹部を刺され倒れ伏す。

奇稻田姫、大蛇に取籠る。

奇稻田 お、此の深手。

素盞鳴、微笑を浮かべ大蛇を見て後、家來を見まわし。

素盞鳴 じたばた騒ぐも、此の大劔にて一人残らず刺して了ふぞ。主を討たれて無念と思

ふ者は、俺の敵手になるがよい。(血に染まつた劔を持つて眺む)

日日日日 私が第一の相手にならう。

八岐大蛇 (苦しみ乍ら)日日日日、早やまるな。私は今迄に、こんな勇者に出會つたのは

初めてじゃ、私の傷はなか／＼深くで、こても生命が助かりさうにもない、私はその素盞鳴といふ人にいさぎよく、此の婦人も、私の領土も寶物も、總てを獻じてあげやう。

素盞鳴 俺にか？。

八岐大蛇 さうです。あなたのやうな勇者が私の國に住まわれて、諸方の豪族を平定される事が望ましい。私には相續の人も兩親もありません、如何か私の領土に行つて人民を愛撫して下さい。

素盞鳴 (感歎して)珍らしい心がけの人じゃ、俺は嬉んでお前の領土や寶物を受けて、諸國を平定しなけりやならない。

八岐大蛇 (手にせる劔を、鞘に納め)此の劔こそ、私共祖先が大切にして居たもので、如何か寶物の中でも一増大切に納めて戴き度いもので御座います。

素盞鳴 (劍を受け取り抜き乍ら、自分の劍も亦抜いて兩方を見比べて後、鞘に納め)よく斬れそうな立派なものじゃ、俺が此の劍を翳して、敵對するものを止してやるぞ、安心するがい。

八岐大蛇 (一層、苦しみ乍ら)私の家來を愛してやつて下さい。

素盞鳴 よをし。

八岐大蛇 (家來に)私に代つて此の偉大なる素盞鳴尊に仕えて下れ。

大蛇、奇稻田姫に抱かれたまゝ瞑目する。

日日日日、大蛇の耳にて。

日日日日 我が主、我が主。

奇稻田 (泣きつゝ)もう、お答へが出来ないので御座いますか？。

日日日日 主の魂は、蛇神の下に飛んで行きました。

家來大勢も、首うな垂れて居る。

素盞鳴 惜しい男だな。………今より俺が大蛇の領土を治むるのじゃ、お前達の中にて大蛇の後を追ふ者があれば、死してもよいぞ、私の家來は河上に數百人屯させて居るから。

家來大勢の中にて、十人あまり劍を抜いて、自殺せんとする。

日日日日 我が主君の後を追ふ役目は此の日日タチヨリがするのじゃ、お前達は新らしき主君の素盞鳴尊に忠勤を盡すがい、私は皆の犠牲になつて行かう。

日日日日は劍を以て咽喉を刺し死す。

一同は涙に咽ぶ。

素盞鳴 此の山に主従の塚を建て、勲に屍を祭つてやらう。二人の死体は山の頂イノネに持つて行くがい。

家來の一 はあつ！。

家來七八人にて二人の死體を右手に運び去る。

奇稻田姫、泣き伏して居る、その手を執つて。

素盞鳴 (家來に) 箆の河上に行つて翁嫗をお迎えして來い、而して屯して居る家來に、急いで、登山する様、傳へて下れ。

家來の九 はい。

家來の四人、左手へ去る。

巨木の上から、小鳥が長閑かに囀へする。

素盞鳴 私の運命は、私が信仰する太陽神のやうに晴々々明るい氣持になつて來た、是からの私は大に太陽神の教へを擴めて行かねばならない、目的の日が一步步々近づいて來るよ、アハ……………。

奇稻田姫は涙を拭き、素盞鳴尊に連れられ、靜かに右手へ去る。

大勢の家來は平伏して、あさを見送つて居る。

—(幕)—

(大正十二年十二月冬至の日)

ありに聖共
 とうし経く孝行
 三小はあけの徳
 行

大正十三年二月一日印刷
 大正十三年二月五日發行

愛染紳典付
 定價金壹圓七拾錢



發 兌 京都市一條通 衣笠園 表 現 社 振替(大阪)二一五五七番	著者 永見徳太郎		
	發行者 後藤亮一 <small>京都市上京區北野白梅町三十二番地</small>		
	印刷者 伊藤一郎 <small>京都市岩上通五條上ル柿本町五八二番地</small>		
行印所刷印堂誠一			

創作

噴血

秋山天水著

殺人鬼か國柱か？

血腥い風が捲き起した昨秋の東京の大震災大火災は、人間ミ、その意識の上に、もう狂ほしい變動を齎らした。その中で甘粕大尉が大杉榮を殺害した事件は、社會の注目を惹いたものなう。

本書はこの事件を、現代某文豪が秋山天水なる假名に立籠り、大膽なる批判を文化人の前に投げ出した時事文藝である。

明治大學學報第八十五號評して曰く、「甘粕事件を主材として、事件の真相を單明に描寫した創作である云々」云々。

第十九版

近日出來

四六版 頗美裝
 本文 百二十頁
 定價 金六拾錢
 送料 四拾錢
 代金引換 七拾六錢

東京 發兌 表現社 東京 都 振替 內 二 一 五 七 番 橋 通 衣 笠 園

東京天文臺 古川龍城著 第四版出來

天体の美觀 星夜の巡禮

四六版ポブリン装幀
コロタイプ版寫眞版
二十數葉
定價金一圓五十錢
送料十錢
ハガキ注文後金引換
一圓七十錢

一九二三年は私共をさまざまに試験した結果個別の人格に、個別の稱讃を、個別の吐瀆を與へました。體驗を得た私共は、傳統の科學や傳統の學說に故なく拘引される事を拒みます。自然力の餘りに偉大なるに對し人類の智さの劣さを惟ふ時、私共は別個の道に、新しい「新生命」を獲得しました。「新しい命」が一つ生れるに、新しい星が一つ増へる。「易經」の教ふる處てあります。星は何か？それは宇宙にばら撒かれた理智の瞬きである。その數は多い。日々を守る七星や夜明や暮を守る、明けの明星、暮れの明星、さては北斗七星なごもある。その數は多い。日々を守る七星や夜明や暮を守る、明けの星、あまりに皮肉な、又は餘りに不合理な世相に疲れた人々の爲めに、星の王國を巡禮する企があります。東京天文臺の第一人者古川龍城先生が、星の人生の交渉を極く趣味深く、極く解り易く、二百頁の本文に數十頁の寫眞を添へて親切に述べられた本書にお集り下さい。

發兌

東京 京都

表現社

京都市一條通衣笠園
振替内阪二一五五七

永見徳太郎著

新興戯曲叢書

月下の沙漠

夢の高殿
星架坡の夜
玄奘三藏

同

痴者の洪笑

女優と同居する男
忘れぬ時代
浦上の盆踊

四六判百餘頁 定價各五十錢 送料八錢

東京市外目白高田鷄山一、五〇一

人と藝術社發行

田中王堂氏 外現代三十名家合著

哲人
文豪
と
戀愛觀

四六版ホイント組
函入布裝美組
本文四百餘頁
定價四十二圓
書留送料十五錢

行くに難い人生の荊棘の中に、兎も角も紅の懷さは戀の一寸實である。ミルク色のプラト
ニツクな戀、止め途も知らぬ中年の弄放な戀、さては血の新しいむぎす黒い戀。それ等には
一ツツの理由があり、批者小千口氏、江口氏、北原氏、石原氏の戀に於いては、現文壇に於
始めにして、他の批者、幾千の道徳、習慣、千の按配なくある。歸趨の岐る、所を知る、爲めに、言葉は古
い、幾千の道徳、習慣、千の按配なくある。歸趨の岐る、所を知る、爲めに、言葉は古
その批者は、聖哲、文豪の歩んだ道、又彼の消息を寫した本邦唯一の愛の教科書である。本
の人生、西の哲、文豪の歩んだ道、又彼の消息を寫した本邦唯一の愛の教科書である。本
先づ古今東西の聖哲、文豪の歩んだ道、又彼の消息を寫した本邦唯一の愛の教科書である。本
は現代諸名士が、次の内容に亘つて、詳細に消息を寫した本邦唯一の愛の教科書である。本

内 容

- 佛キリスの戀愛觀
- トリスの戀愛觀
- 戀の放浪者ルメツツ
- ニツクの戀愛觀
- ライツセマンの戀愛觀
- ホイツセマンの戀愛觀
- クイスバニエスの戀愛觀
- 岩野泡鳴の戀愛觀
- 有島武郎の戀愛觀
- 愛は島泡鳴の戀愛觀
- 平安朝時代の戀愛觀
- 死の戀愛觀
- 無近現代文學に描かれた三角關係
- 蛙の戀愛觀
- あゝの戀愛觀
- 戀愛の清愛事
- 戀愛の道談
- 戀愛の意
- 戀愛の考
- 戀愛の察

東京 表現社 東京 發兌
京都 表現社 京都 發兌
大阪 表現社 大阪 發兌
市都 表現社 市都 發兌
條一 表現社 條一 發兌
通衣 表現社 通衣 發兌
笠圓 表現社 笠圓 發兌



終